

李登輝前総統と花蓮・太魯閣

おおよのえいじ
大矢野栄次 ● 本会理事
久留米大学教授



大矢野栄次理事

今年三月二十一日に台湾で李登輝前総統にお会いした。福岡地震の翌日でもあり、対談は李登輝氏の「家族は大丈夫ですか」という思いやりのある言葉から始まった。

私には、以前から、李登輝氏に会うときは是非聞きたいと考えていたことがあった。司馬遼太郎氏の『台湾紀行』の最後の舞台である花蓮「太魯閣」^{タロコ}についての話題である。

李登輝氏の答えは、私の脳裏にへばりついた花蓮・太魯閣の霧と雨を晴らすものであった。そしてそれは、台湾の歴史を語るのに最もふさわしい「太魯閣族」と「太魯閣公道」建設の歴史でもあったのである。

司馬遼太郎氏が「こんどは東部の山地にゆきますが」と李登輝氏に語ったのに対して、花蓮

には「ボクが案内する」と李登輝氏が提案した。司馬遼太郎氏は「こんなえらい人に案内されてはたまらないとおもいつつ」、ともかくも、断った。「ところが、この人は首をかしげたまま、『しかし、(山地の)歴史を知らん……』といった。だから自分が案内せねば、というのである」。

司馬遼太郎氏が花蓮市内に入った翌日の夜、宿泊先の中信ホテルに李登輝総統が奥様と嫁と孫娘を連れて訪ねてきた。李登輝氏は、翌朝、「断崖と絶壁と急流の景勝」である「太魯閣」を案内したいと提案した。しかし、司馬遼太郎氏は、「景勝よりも朝寝がいい」と決めて李登輝氏の案内を断ったのである。この頃、既に司馬遼太郎氏は体調を崩していたため、李登輝氏の太魯閣への誘いを断ったという説もある。

「太魯閣」は「太魯閣峡谷」といわれる二十七の高山からなる。壮麗な清水断崖があり、三千メートル級の山々に囲まれた谷間の地、所謂「景勝の地」である。対談の際に、李登輝氏は「山全体がマーブル（大理石）なのだよ」と言われた。さらに「将来は太魯閣を世界遺産にしたいと考えている」ともいわれた。

太魯閣の切り立った尾根に縫うように道が彫られている。「太魯閣公道」である。

李登輝氏の説明はこうであった。台湾にはもともと山岳地帯に住む「高砂族」と低地に住む「平埔族」の二種類の原住民が居た。やがて中国大陸から渡って来た人々と混血し、「平埔族」の人々はいなくなった。これが現在の台湾人の祖先である。「台湾人に中国人のおじいさんはいりけれども、中国からのお祖母さんはいない」といわれる所以である。

「太魯閣公道」建設の歴史は百年である。日本が台湾を植民地として以来、高砂族を宥和するためにいろいろな政策が採られた。時には反抗に会い高砂族征伐も行われた。征伐するため

に太魯閣公道の建設が始められたのである。李登輝氏の父は当時警察官であり、この征伐に向かう警官を派遣するときに関わりあったそうである。李登輝氏と太魯閣族との関係を物語る一つである。

李登輝氏はもともと農業経済学が専門である。彼の説明では、当時の台湾の農業研究は三つの分野に分かれていた。①「サトウキビ生産」についての研究分野と②「高砂族の農業とその指導」についての研究分野、そして、③「インドネシアの農業」についての研究分野であった。李登輝氏が選択したのが「高砂族の農業とその指導」であったそうであり、その関係で霧社に居たことがあると話された。「焼き畑農業を止めさせ、定置の畑作を指導するためだよ」と話された。李登輝氏と高砂族とのもう一つの間接関係を物語るものである。

『台湾紀行』において、李登輝氏が司馬遼太郎氏に説明したかった内容が、この太魯閣・高砂族と李登輝氏との関係を通した台湾の歴史であったのである。